

# 國學院大學学術情報リポジトリ

写真発明200年記念企画ワークショップ：  
「研究者のための撮影術 2：光あれ！」（共催）

|       |                                                                                                  |
|-------|--------------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者:<br>公開日: 2024-07-02<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者:<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://doi.org/10.57529/0002000614">https://doi.org/10.57529/0002000614</a>            |

## 写真発明200年記念企画ワークショップ 「研究者のための撮影術2—光あれ！」(共催)

写真の公式な誕生は1839年とされてきた。フランス政府がダゲレオタイプで知られるダゲール(Louis Daguerre)の写真撮影の特許を買い取った年である。しかし、写真家の港千尋は、それに先行する1822年にニエプス(Joseph Nicéphore Niépce)による最初の実験成功を写真誕生の年と位置づける。すると2022年、今年は写真誕生から200年となる。その間大量の写真が撮られてきた。歴史を変えた一枚もあれば、「映え」写真として消費されていた写真もある。

研究も、写真の誕生の影響を大きく受けることになった。聖地や〈聖なるもの〉をとらえた写真は、遠く離れた異国の聖地へと人々を誘い、教祖の写真は信者に神秘性とリアリティを与えた。この200年とは、近代的な学問としての宗教学・人類学の歴史とも重なり合っていることも重要だ。

研究者は研究や教育の場で写真を撮影し、教材として使用する。写真の重要性を認識しながらも、その撮影術については、私もあまり考えることはなかった。しかし、つねにもう少し良いものを…という思いは抱えていた。その思いを写真家の港千尋氏に相談し、企画することになった研究会が「研究者のための撮影術」である。2020年12月28日に科研費(基盤研究B)「日本宗教教育の国際的プラットフォーム構築のための総合的研究」(研究代表:平藤喜久子)によるワークショップ「研究者のための撮影術—カメラは悪くない!」を開催した。

そしてその問題意識を発展させる形で行われたのが2022年1月24日に開催された写真発

明200年記念企画ワークショップ「研究者のための撮影術2—光あれ!」である。本ワークショップは、前年度同様科研費による主催で、日本文化研究所には共催をいただいた。

講師として、天皇陵写真を撮影してきた伊奈英次・写真家・東京総合写真専門学校校長、裸祭りの写真で知られる甲斐啓二郎・写真家、そして前回に引き続いて港千尋・写真家・多摩美術大学教授を招き、研究者と写真家による写真をめぐるディスカッションが行われた。



伊奈、甲斐両氏の貴重な聖なるものを撮った作品の数々を説明とともに鑑賞したうえで、ディスカッションでは、研究者の「失敗写真」「成功写真」を例に、「もっとよく撮るには」という率直な問いを巡って、アドバイスをいただいた。

本ワークショップは、写真というメディアの使用法、利用法を巡るものであり、研究だけでなく教育にとってもきわめて有用なものであると考える。今後も問題意識を共有する研究者とともに写真家の胸を借りる機会を作っていきたい。  
(平藤喜久子)